

F-2 農村住居のすまい方に関する研究 (第2報)

信州大教育 三石千代子

目的 第1報にひきつゞき 変りつゝある農村住居のすまい方についてその実態およびこれからのあり方について研究する。今回は「居間」と「個室」をとりあげ 住居内における“あつまりべや”と“個々のへや”の関聯性と実態を明らかにし、これからのあり方の手がかりとしたい。

方法 研究調査地域として2ヶ所を設定 (A)長野県下水内郡栄村 (B)長野県南安曇郡穂高町とする。(A)は県下における豪雪地帯 積雪地帯の住居で 農業形態は住居と密接に結びついている。(B)は安曇平にある県下有数の水田地帯で住居規模は大きい。この2地域より農家をそれぞれ50戸をえらび対象とした。調査方法はアンケート、および現地における実態調査、戸別き、とりにより行った。

結果 A地域においては建築年代90年以上が56%以上を占め、建坪は30~40坪がピークである。豪雪という自然的制約で間取りは小さくなりがちである。この中で健康的なすまいへの個室の考へ方、居間のあり方が地域的意識の改善とともに積極的に進められなければならないと考えられる。B地域においては100年以上が18%と古い住居は比較的少ない。建坪は30~50坪がピークであるが宅地が極めて広い。この地域は居間を冬季は南に、夏季は涼しい北側がしきりと積極的に移動させている。このような進歩的意識の一面個室の考へ方には未だ問題があると思われる。